瘤硬化療法に比べ，簡便で合併症も少なく安全な方法であると考えられた。再出血など長期予後に関して今後検討を加えていきたい。

43. 高齢者胆道癌の治療経験

大久保裕司，渡辺桂子，岸　幹夫
笠貫順二　（横浜労災・消化器科）
庄吉　知久，三浦文彦，久保田亨
保元　明彦，高石　聡，丸山尚嗣
大島　郁也，有我隆光，尾崎正彦
（同・外科）

手術不能高齢者胆道癌４例（平均年齢83歳）に内視鏡的内瘻化による治療を経験した。下部胆管癌２例にRALS（remote after loading system）を試みた。退院後平均441日生存し，胆管炎による敗血症による死亡１例がみられた。他の死亡１例は原疾患と無関係であった。ステント閉塞に対する入院を要した日数は，約15日間（3.4%）と短期間であった。合併症は貧血と胆管炎による発熱例がみられたが，良好な QOL（Quality of life）を得られている。

44. 当院における IBL like T cell lymphoma の２例

松本　功，奥山恭子，渡辺紀彦
山田克己，西村美樹，蓮沼桂司
秋元敏佑，松岡祐之，安見和彦
（成田赤十字）

IBL 様Ｔ細胞リンパ腫は，比較的まれな疾患であるが，当院の２例を報告する。２例とも全身リンパ節腫脹，発熱等の臨床症状が強く，高 γ グロブリン血症，LDH 高値がみられた。１例は充分な MACOP-B 療法にて完全寛解を得て，現在も外来管理しているが，もう１例は高齢の為減量した化学療法を行いざるを得ず，再発し，永眠された。予後不良といわれているこの疾患でも，充分な化学療法にて予後の改善は可能と考える。

45. 自己免疫性好中球減少症を合併した IBL 様Ｔ細胞リンパ腫の１例

小林弘一，石毛憲治，佐藤　宏
吉田象二，児矢野繁　（旭中央）

症例。49歳，女性。主訴：発熱。現病歴：1992年７月近医にて左鎖骨上リンパ節腫大を指摘され生検にて IBL 様Ｔ細胞リンパ腫と診断。８月11日当院転院後，化学療法計９コース施行するも MR から NR であった。1993年１月下旬より好中球減少症（WBC 1000/μℓ，好中球20%）と血小板減少（PLT 500/μℓ）が遷延。抗好中水抗体陽性，PAIgG 1346と高値を示したため自己免疫的機序での好中球減少が考えられ興味ある症例と考えられた。

46. 濾胞性リンパ腫の臨床的検討

森尾聡子，岡　邦行，宮本忠昭
（放医研重粒子治療センター）
門澤浩二，中村敏博，王　伯銘
（千大）
三方淳男　（同・一病）

対象は1965年７月より1993年６月までに濾胞性リンパ腫と診断された33例（男性20，女性13：平均年齢52歳）で，組織型は中細胞型20，混合型９，大細胞型４例；病期はⅠ期４，Ⅱ期６，Ⅲ期９，Ⅳ期14例であった。治療は一部の症例を除き放射線療法と化学療法の併用が行われた。観察期間は８カ月から12年で，５生率は66%，無病生存率は48%，10生率は58%であった。予後因子として病期・組織型の他に Bulky mass の存在が考えられた。

47. 経過中に便培養よりサルモネラ菌が検出された重症虚血性大腸炎の１例

山田克己，熊野浩太郎，堀江美正
伊能崇税，深沢　毅，松本一暁
（成田赤十字）

患者は75歳，女性。糖尿病と高血圧の既往歴あり。1993年８月，発熱・嘔吐・腹痛を主訴に当科受診し入院。脱水，急性腎不全を認めた。大腸内視鏡検査で横行結腸に全周性潰瘍性病変を認め虚血性大腸炎像を呈し，直腸にも縦走性潰瘍性病変を認めた。経過中に便培養によりサルモネラ菌（0-35群）を検出した。虚血性大腸炎に糖尿病や高血圧，感染に伴う循環障害が関与したと考えられる症例を経験したので報告した。